

奇靜 三保

就 答

今こそ
雪の
ふるま
いの
あつ
はな
はな
はな



廣告

宇田川文海校 旭亭芳峯書

浮萍夢枕 第一編 定價八錢

右は一回朝日新聞紙上に掲載せしより江湖の喝采と得たる近來の續物語の中にて尤も興味多きものなれば世の小説愛讀の諸君競ふて購求あらんとを請ふ

曲亭馬琴著 葛飾北齋畫

三七 南柯夢 初篇近刻 定價五錢

此書の筒井順照補を切を始めとして木精の怪より半七三勝の奇偶を説き然も艶曲淫奔の脚色を籍りずして古今人情の意を盡し哀れに面白き物語なり

右の何れも出版につき前金御送りの上(右郵便税半分の駈々堂で受持)即時に配達仕ります遠國にて不便利なる地の郵便切手を以て御注文状へ堅く封じ込み御送りにもよろし

明治十六年五月九日御届 出版

(定價六錢)

校閱 石堂 情史 編輯兼 滋賀縣平民 出版人 内藤 久人

京都府上京區第三十組下 本能寺前町卅六番戸寄留

西京發賣所

駿々堂本店

東京發賣所

萬字堂本店

大坂發賣所

岡島支店

特別賣捌所

東京通三丁目丸屋鉄次郎 大津西今風町駿々堂支店 函館地淵町 田中兵太郎 大坂唐揚町 鬼屋支店 越後長岡 大橋新太郎 神戶 廣岐多度津 弘貫社

し小室井が賭場の様子と聯合すに同府近在なる某院といふ無住の梵刹を借りうけて最も大に掛さるは賭に勝りし事なるにぞ然らば一泡吹かせて吳んと頼て同場に至りつ、扶さもせ中胸巻より額銀(當時の壹分)の二十五兩包を取出し益延の上へ二個を投げ一甲州信濃で入に識られた小室井の藤二郎兄イへ初對面の樽代に額の包の送り物思つた儘に眼の立ぬ(素より承知の一點)一でも六でも勝手な處へ其方の都合で張るがい、卑法にツリ掛チ一から安心して勝負をしると大の男か人もなげに罵る辭に剛禁せし多くの樽徒も呆氣に取られ顔打守り黙然と手を束ねたる計りなるが小室井の冷笑ひ一野分の風に吹かあらされめんを映つて来たかは知らねど小賭場暴しの旅烏口背青き小雀等が罷いた賭場なら誘知らす樽置把つては大駒の宙字を廻るに異ならぬ此小室井が大場の来て大層らしく切餅(當時二十五兩包の通語)二個を天にも地にもない様に見せに来たの正氣にやあるめへ手か出し度べ自分相應法螺と吹かずに張ておけ草鞋錢の台力なら切おげの後呉れてやると投げ返したる金包を手になに取らす三保の松の願省て連來し部下の五人に打回ひ一ナント後達

廣告

寺田川文海校 旭亭方峯書
浮世夢枕 定價八錢

右は一回朝日新聞紙上に掲載せしより江湖の
喝采を得たる近來の積物屋の中に尤も
味多きものなれば世の小説愛讀の諸君就て
購未あらんことを請ふ

南柯夢

定價五錢

此書は南柯無痛を切を始りとして木橋
の怪り半七三郎の奇偶を記さる地曲書
の脚色を精りして古今人情の基を盡し
に面白き物語なり

右の何れも出版のついでに金銀送りの
郵便現手分の便を蒙りて即時に
御注文状へ空封し込み御送りにて

明治二十六年五月

校閱
出版人

東京 萬字堂本店
大坂 萬字堂分店
京都 萬字堂分店
西京 萬字堂分店

東京 萬字堂本店
大坂 萬字堂分店
京都 萬字堂分店
西京 萬字堂分店

特別寄附所
大坂 萬字堂分店
京都 萬字堂分店
西京 萬字堂分店



小室井が賭場の様子
と聞合すに同府近在なる某院といふ無住の梵刹を借りうけて最と大
茶は掛さぬるは壇に賭りし事なるにど然らば一泡吹かせて吳んと頼て同境に至りつ、扶
もせし願巻より額銀(當時の壹分)の二十五兩包を取出し益延の上へ二個を投げ「甲州信濃
で人た識られた小室井の藤二郎兄イ、初對面の樽代に頼の包の送り物思つた壺に眼の立ぬ
の素より承知の二點一り一でも六でも勝手な處へ其方の都合で張るがい、卑法にツリハ掛
まへから安心して勝負をしると大の男か人もなげに罵しる辭に團圓せし多くの博徒も呆氣
に取られ顔打守り黙然と手を束ねたる計りなるが小室井の冷笑ひ「野分の風に吹きあちさ
れめんを映つて来たかば知らねど小賭場暴しの旅烏口替青き小雀等が胡いた賭場なら誘知
らさ意匪把つては大鵬の宙字を翹るに異ならぬ此小室井が大場の來て大層らしく切替(當
時二十五兩包の通語)二個を天にも地にもなげ見せに來たの正氣じやあるめへ手か
出し度バ身分相應法螺と吹かすに張ておけ草鞋鐵の台力なら切おけの後呉れてやると投げ
返したる金包を手になに取らず三保の松ハ願省て連來し部下の五人に打回ひ「ナント汝達

これを見たか甲州の小室井とか、中俠客の藤三郎とか、扇の大した男だか、聞くと思ふと、大違ひ此馬鹿らしい状を見る童兒が、集ての骨牌遊び小皿に盛た端緒の勝負が相成してゐる。僅二個の切餅に賭を潰した今の狼狽相人に、そも大人氣子へと飽まで蒸加嘲弄辭の尾につく鼠輩の部下等も、同じくドツと打笑へば、心憎しと小室井は座に居直つて、此方に對ひ「見れば立派な男だ、が遊人の交誼を挨拶知らぬ唐舞木橋の結方風俗の積鼻揮擲の免件固破落戸連を力として白痴威しなる奕場のせ、り旅費に尽たか知らねへが他の賭場なら知らずへ事此小室井が開いた場所、で前後思ひぬ其惡口惘然想だが、以後の爲り懲らしてやるから、然う思へど指圖と待て前刻から腕をならせし小室井の部下四五人、突然三保の松が兩腕把り引籠さんと立か、れバ申戯するなど振り拂ひ忽ち襟髪無手と把り宛も手鞠を弄する如く三間ばかり投げ出し續いて掛る兩人と左右の小脇に引抱えグツとびたる柔術の精妙兩人の男の腕に捕られし小鳥の如く身動きならず唯「ハナク」眼と見張のみにして、最とも苦しさ形状なれば他の部下も三保の松の本事に太く駭きて我か、らんと勇み、ものも尻込なしてひかへ居たりぬ。

○第十四編

不意に起りし三保の松が我威暴行に小室井が部下の者いた、呆れ結ひて組つく者もなければ、然もこそあらめと三保の松の場中を看廻し聲ふりたて「富士と隔ての甲斐駿河互ひに逢はねど名は知つた長脇差の男一疋小室井藤三郎が賭場へ来て出過た業も持たが病ひ當り、駿河の府中にて西の九州中國四國北の奥州蝦夷松前其果までも鳴響く安藤文吉の食客駿遠三を跨りかけ土俵と賭場の日下開山富士より高く名を知られた三保の松清三郎ど、己が事を遊人の交誼知ぬ旅鳥なと吐したから、其旅鳥の羽翼に此小室井が活さない、ア甲奴乙奴の用捨いせぬ死ぬる覺期でかる、グイ、と飽まで不敵の惡口雜言堪へ兼つ、大勢の部下一同立上れば何思ひけん小室井の「アヤ」とこれを押しめ群り騒ぐ部下の者を呵り退けつ、容儀と正し「又手の汝の雷名高き三保の松端にて在せしか顔も知らねば不躰に意外の無禮を今更にお謝するより外いなし何處と旅宿に爲し玉ふや後日必ず此方から迎ひの人と立たうへ知己の一献を呈したし何卒今日の部下の無禮の宥し玉へと辭さへ下から出れば附あがる

自誇我慢の三保の松の漸やく絞たる兩
 人を放し「然う改まつた挨拶なら素よ
 り事を好まぬ我々當地の旅宿の柳町の
 上總屋方に滞留せり辭にまかせ後日と
 待ち知巳がてらの催しすべし先りれで
 の今日のところは云ざる聞かざる話さ
 ざると三保の松の部下を引連旅宿と投
 して歸り行きし跡見送るさへ部下のも
 の遺恨やるかたなき体を藤三郎のそ
 れと察し萬事己の胸にあれば急ぐ處
 るでなれ耐忍としろと制し止めて當日
 の勝負の夫れ限りにして部下と引きつ



れ何か思案たくれ近く和道傳ひ小室井
 の我來へこそは立歸りぬ茲頭藤三郎が
 部下の中に病犬長次といふ者あり芥も
 此者病犬と綽號と附され小室井が一
 部下と崇められし子細を聞くに先年甲
 府の町に最と年を経し一頭病犬あり
 て晝の其影にだに見せされ夜に入
 市街へ出で往來の者を害する事抄る
 からす度々此犬狩を催し追立るものわ
 れど却て負傷するのみにして聲留る事
 も得ざりしが或日長次が湯歸りに不圖
 此病犬に出遭ひしに忽地吠ひ付んとし



たりし故長次の礎と怒りつ、婦女童子のいさ知らず此長次様を殴りんとし不敵奴イテ撃殺して他人の難儀を除いて呉んと飛か、らんとする大の横面下と拳もて力を籠て擲しに犬のますく怒狂ひ牙とならして飛つくを縁に其場へ撃殺せしかば人々其家騒に駭きて後ハ小室井の病犬長次と喚做せりと閑話休題長次の今日の三保の松の舉動を憤怒なし歸るといふに小室が居室に至りて膝とす、ませ开も何事と説出すや後編の續話を看玉へかし

○第拾五編

登時長次の小室井が傍に差寄り容を更め「十四の年かゝ親分の庇護で今日まで人中でも後を取らず此土地で長次兄いと云はれやした私が私ヤ今日から堅固になり天秤棒と擔いで度遊人にやなりやせんられ故更め親分部下の縁が斷て貫ひ度と敷から棒に云ひ出せし辭を聽いて小室井の「何う云々譯かしらね」が破落戸社會を廣めにして堅固になるとの結構だが多の部下の其中でも力に思つて居た和公俄に眞面目になり度とは彼の喧嘩の爲返しに三保の松と立引する氣か「エ、」虫を殺して耐忍として歸つて來ても己が腹に深い謀みのあ

つての事それを意氣地のない者と見限つて親分部下の縁を斷つ其うへで反るか乗るかの決闘として萬一負を取つた處が俺の汚名にさそまいと飽まで義氣ある和公が心底藤三郎の感心したコソ有難へ禮のいふぞよ併縁は斷れチへ「成ばど有難の親分だけ私の腹と見抜た一言如何にも今日の賭掛懸し猪野郎の三保の松をアノ儘に爲チヤア親分が今まで磨いて面に泥其流れと汲む私等も再度江湖が歩行やせんから渠奴を殺すか此方が死ぬか二ツ一ツの命の取合りに附チヤア親分と縁を斷て置なけりや尙さら貴兄の耻辱だと勘考込んご今の怒みそれはど指量しなざるなら私が願ひの縁を斷ち存分やらせておくんませへ「其の腹立チヤア和主よりまだく焦の俺の胸を刺つて耐へて居るといふも渠奴ア何程強情でも高がしれたる角力上り恐る、事の毫もチへが今三保の松が兄と頼む安藤村の文吉の駿深三で講られた男殊に平常慈悲深く非道な品行なれど言ので甲府にも又吉を慕つて部下にありてへどの噂のあるも聞いてゐるから迂闊な事して三保の松と喧嘩をはじめ小室井が此甲州の地の素より六十餘州の博徒に後指でもさ、れた日にヤア今日の耻辱に勝つた事ゆゑ涙と内へ

香み込んで故と辭を低く出て無事にアノ場を引あげたが還恨を散す魂膽の歸る道々考て明日の斷然やる積りサ「フム夫じやア渠奴を人知れず」ハテ俺も小室井藤三郎だ只た一人の三保の松を暗殺の後日の取俺が所有の此通りと立上りつ、手函の中より七代目團十郎が幡隨長兵衛の似顔繪を取出し長次の前に措置にぞ「陸市川の俠客幡隨長兵衛の錦繪を親分が所有とハ「サア夫はどの男でも水野の邸で一突に「ム、成ほどこれで讀めやしたと點頭折から隔の襷を掛け入来る兩人の部下「委細の残らず聞らや一た通曉を計斯すに如かず「ア、コリヤ壁に耳だ討にしろ「台點だと四人の者の向か秘に密話居たハね

○第十六編

却説三保の松の思ふまゝ、に小室井が銀張の賭場を暴行なし渠が部下「打せせ」もあはれど心地よく旅宿に歸り部下の者等と休むに折酌かはし邊近の廓の遊妓と聘さよせ奥に入たる折からに小室井方より來りしとて旅宿の下婢が携へ來し書狀を把つて三保の夢の封緘を讀下すに今日圖らする兎貴と知らず部下の奴等が無禮をなせしハ呉々驚愕ありたけれ夫に就

てハ知己のため鹿酒一献を献じたければ明日の夜お出を願ふなりと言辭短簡の案内状せよ清三郎ハ承知の旨と返事に認め送りしもの部下の者に打向ひ「何とこれと看る甲府の俠客どか堵徒どかいふが僅か二人か三人の部下を取控いたが仰天しての謝書狀珠に招待の案内どの餘つは必腰拔な親分様これといふのも文吉兄ハの名前に恐れてビク／＼と知己になり向後とも駿州路から堵場あらしの鳥の來ない用心だらう聞くと見るどの大違ひ喧嘩の張も無つたど人もなげなる大言を誰とて諫むる者もなく皆三保の松が力量の勝れし事など費情し酒に性根はなかりけり斯て翌日の夜三保の松の約束の刻限より小室井方へ赴かんとて支度の折から元三保の松が部下に鮫魚金次といふ者あり生國の尾州名古屋にて今度母親の病氣もあ故郷へ歸りしに母の病氣も全快して再度駿府へ立出つ三保の松方へ至りしに小室井が我が土地にて銀張の賭場を開くと聞き見物旁々赴さしどおはまの話に鮫魚は相人の甲府で名代の男知已もない親分が平常の我慢で張合ては喧嘩にでもならうも知れず殊には連て往かれた部下ハ皆近ごろの渡り猿頼みになるハ一人もなし兎も角私も往らやせうと親分思

ひの金次が辭におはまも最と欣びて何卒お前が氣を注げて成たけ短氣の出ない様萬一のことでもあつたなら早速人もて知らせておくれ文吉親分とも相談して返事をするから多勢に無勢といふ事をくれく云つて下さいと本夫思ひの言傳と吞込金次は道を急ぎ馳て甲府へ着たるうへ早速上總屋方へ赴きしに三保の松が同行とし部下の者が云々と昨日の勅止を話せしうへ今親分の小室井の招きで同家へ行どころを聞くより金次の不をなし親分一人を招くどの何うも訝い先の舉動こりや容易にはやられぬと脚絆の紐も解やらす奥の坐敷へ打通りれば夫と看るより三保の松の「オ、鮎魚か何時来たのだ」「へい今若九計りだ」が親分今日の小室井行のこりやア止た方か宜からうぞと金次が止めし後の話の序も如何なるか次編に説べし

○第拾七編



今小室井方へ赴ひかんとする三保の松を須臾と止め金次の徐にいへる様「親分が此甲府へ昨日立たといふ跡へ私の名古屋から駿府へ歸り動靜を聞けば云々と姉公の話説に其夜を待す府中を立て来やしたと文吉親分も心配して相人の名代の小室井藤三油斷を爲すヤアならぬいと姉公へ贈もあつたといふから今夜親分が小室井方へ行なさるなら私を始め部下も一緒に連れて往て安心さしておくんませへと云と此方ハ打消く昨日の勅止くしらないから心配するも



無理では子へが親分とか兄いとかいふの世間の風聞のみ高が知れたる小室井が何んな謀計があるものか頭と低て一日も早やく駿府へ歸つてくれろと頼みの徴の知己を盃酌んだ肴の金包の手前をはじめ他の者へ土産にするから心配せず茲で一盃飲でるやれサ「キア其下から出た動靜が腹の底から折れたでなく深い所存のあり想に私一人は思ひやすから今夜の處は是非とも一所に「ハテ三保の松とも云はれながら案内もなれに部下等と連れて来たのの小室井と恐怖た所爲といはれて俺ばかりでなく文三兄を俱に卑怯といはすも同僚假令五人が十人であつて来ても此方も勇黙つて自由にやなつて居ない腹の小室井でも取す手術はしめへから万一喧嘩になつたも聞いたら其時力を協してくれろまだく骨と拾ふまでにや大分間があり相だど金ふが諫めを肯ざるにぞ強て云す是非なくも密に教意なしたるが三保の松の軀て身支度整のへて小室井方へ赴しゆる命次の獨り熟々と平常の氣質云ひ出しても止まらぬ人であるなれど今日小室井が喚寄せた何でも謀みのある事なるべし假令宅まで行れずともアノ近邊に彷徨て万一怪しき舉動もあらばはやくに飛に加勢を

せんも他の部下へも吩咐せ見咎められざる機姿を變へ小室井の宅の邊りを其處此處と忍び歩行て夜を更しぬ「小室井方での隙を待設けたる座敷の一室へ三保の松を請ひ入れ嘉肴珍味の堆高く處狭さまで列べたて主個藤三郎の羽織袴の衣紋繕ひ出来り「山家育の不躰に井の内の睦同様兄いと知らず昨日の無禮唯幾重にも勘忍ありて今から後の心易く交際願ひ徴まで定めて口には適ひ升まいが誘一献と過してたべと傍へにありし五合入の大盃を手に把りあげ三保の松の前へ差出せし此段未だ全たからねば次編に詳細記載すべし

◎第拾八編

再説小室井藤三郎の最と懇懇に三保の松と待遇ものから思慮候さ此方の謀計の良どの知らず強られるま、因辭もせで大盃の續け飲み忽地充分酔ひたる状と前列のはせより威ひし小室井の三保の松の側近くすり寄つて「昨日の互ひに角芽出し詞の角も丸く折れ斯う隔意なく打解けて知己となる上からい逆もの事に未始終兄弟分の盟約をして行末長く交際たぬ故の桃園に義と結びし三葉傑の例にならひ俺に關羽の勇なくとも和服ふ支徳の徳あり今

より兄と敬稱て土地も恰度三國一富士を跨る甲斐駿河其盟約は此盃觸へ生血と紋酒に
 混じ飲んで兩個の精神と表せん勝三保の松異存がなくは痛さを堪へ其肥満たる肉と裂き此
 へ絞れど座直つて指出したる大盃觸三保の松も身を構へ「昨日の無禮を詫せんと招き寄せ
 たる今宵の酒宴兄弟分になり度どの最と舌長なる其言分併頼みどわるならハ弟分には爲
 てもやらうが夫れを盟約の盃へ俺から血汐の流されテハ威勢に怯た汝が性根の眞實男と
 磨きたくハ先疲腕を突裂て赤き心を見せるがい」と臆する色なく言放てハ小室井の莞爾と
 笑み砂を掴んだ喧嘩を爲ても未だ血の雨を降らすはど決闘の場所を知らなハもゑ肉と破る
 が夫れはど怖いカヨレこの藤三郎ハ一年三百六十日喧嘩に絶ぬ生迄を絞り込へすりや一
 升二升の血汐を出すにや難作もチハ俺が血を見て眼眩み臆れが出てハと思ふから汝に先
 に破らすのだ併痛みが案じられ豈夫生血ハ出されれハと云はれて短氣の三保の松何條纏
 なすべさか側に置いたる一刀引抜き「オハ其血の出處の汝が腹と突掛らんとする折しもッ
 ンど一聲小室井が合圖と、もに此方の腰とガフと開ラ後鉢巻玉禱六尺餘の竹槍携へ

れ出たる病犬長次「オア三保の松親分が所望の生血を貰ふのだ覺期をせよと突かくると何
 小癩など丁どうけ疊の稻妻虚々實々聞ふ隙を窺ふ小室井白刃を以てきりかゝる左右の敵に
 三保の松ハ身を堅めんと後すさり壁に添ハんとまたりしが思はず床に躓いて尻居に堂と倒
 る、處と起しも立止病犬が得たりと突込み一槍ハ股の邊と深く刺す痛手に再び倒れながら
 「卑怯未練多小室井め汝ハ今に覺て居るハ後ハ舌さへこわりしか眼と瞋し齒を噛しめ無
 念くといふ聲を左もことわらんと小室井はじめ長次其他の乾兒等が膽の如く切さいなみ
 息の絶しを見よまして死骸ハ萬籠の中に納れ大石を括りそへ程近き川の深淵へ沈めしを知
 る者絶てあらざれば鱈魚金次が立廻りし其甲斐とてもあかりしなるべし

○ 第拾九編

斯る事どの毫知らぬ金次の終夜小室井の家の邊りと窺ひしに敢て怪しき事さへなければ無
 事の酒宴のありたる事よと旅宿に歸りて枕に就さしが翌日の四ツ過に至りても三保の松が
 歸り來ざるゆゑ仔細ぞあらんと金次を前に乾兒四名ハ打連て小室井方へ至りつ、三保の松

の迎ひに來りし飯さや言入しに夫れと聞くより藤三郎の自身に出て五人の者と一團に話して辭を再ため「三保の松兄イとの昨日圖らず兄弟分の盟約を爲たか和方公に榮々逢ふの今日が始めて實の昨日の知己に定めて一緒に來るだらうとまつて居たのに出て來ねへ近ごろ遺憾の事夫について和公方の兄イの迎ひに來なすつたらうが三保の松の今朝早く私の方へ歸られたが今に旅宿へ歸らぬどの何だか訝しい一位だ併駭河の府中から一緒に連れて來た乾兒と振樂るでもあるめへが實の昨宵三保の松が之れから越後へ出かけて行が旅費が少し不足から二百兩丈け貸てくれると無心と言れて否とも云へぬ兄弟分の杯盃と爲た中も悉に頼みの通り貸て與へた二百兩夫じやア何處に引か、り甲府女の肉蒲團に暖つて居る事だろうと眞實しやかあいふ体を金次の外の誰あつて怪い辭と思はねば成はせ然うかと思ふら兼て吩咐置たりしか乾兒の者が運び出す酒と肴の盛狭き坐敷に列へて小室井が昨日招かぬ其まゝしに何のあくとも先一ツと献れて四人の乾兒等の下地の好なり時刻のよしと迎ひに來た三保の松が其跡蹟を尋もせで銘々此處に大胡座酒に飽念なかりし中にしやち魚金次

の藤三郎が前後柄はぬ挨拶を不審と思へど胸に一物故と解けたる面色にて他の乾兒と俱侶に酒酌かはし四人に對ひ「何と昔聞いたか乾兒の者を宿に借さ汝一人が愉快遊んで暮す親分に引替へ斯んなに馳走の待遇に慈悲も深い小室井親分流石名代の遊び人相撲あがりの三保の松が眞似も出來ずへ了簡だと微辭機嫌で話を聞き小室井の打笑みて「駿府で名高文吉兄イの其片腕の三保の松中々私に及ばねへ併し世に云ふ鳥なき里の編野郎の此小室井これでも些少の土地の者に兄イくといはれるの小室井の親分に姑く腐た庇蔭だか前方も此後の兄弟同様な心易く甲府へ來たなら尋なせへコリヤ長次汝も一献お聞をして知己になり頼むがい、と喚れて應と返辭つ、長欠の其場へ立出て一々挨拶をりつ、類に酒と肴めしかば四人の者の正体なく酔潰れしが金次一人の始終小室井一家の者に心と注けて動靜と窺ひ不審の廉々心に覺ぬ其身も酔ふたる体をなし四人と、もに柳町の旅宿に歸りし後の話の次編に亞いで續みたまへ

○ 第二拾編

斯て金次を始め五人の乾兒は上總屋方へ立歸りしが金次の右様左様に小室井が辭を疑取て其夜の碌に寐されども他の者等の正体なく思慮も所存も白川夜船鼻息も高く酔ひ臥せしが翌日の一同に類を合せ茫然と楫楫に放れし船の如く互ひに顔と見合せし中にも鳥毛の宗次といふ乾兒が金次に打向ひ「鯨魚の知るめへが今度親分に連れられて此地へ来たも什置によつたら小室井三と命がけの決闘をするから其氣でゐる倘其處まで花も咲かず先が折れたら骨折代にマツマツ有附賭場暴行並等が顔の賣處だと勘められたで乗込た其狂言の中りの外さず甲府で顔を磨いて居るアノ小室井と一遍の決闘せすに謝罪せたい素より親分の力だ夕私等とても其時にへコマす腕を見せたゆゑ小室井方も幾分か度胸に怖て親分へ謝尾の劫の交際杯盃無事に勝鬪揚たのめ、が命を的に出かけて来た乾兒の者へ沙汰なしに二百兩とば絞めて越後行さとの親分とか兄いとかいはれる賭徒が餘んまり出来た蕪じや子へ其體な人をば雷にして怒々此處にやア居られ子へから配當された小遣銀のある間に早く立と爲やらめりへも一所に行か子へかど云はれて金次の打點頭「成るなぞ鳥毛がいふ通り武

士で言やア僅の人数で敵計りの賭場の中へ飛込んで来た味方の乾兒と乘て越後へ抜がけたの大將のする業じやア子へこれが無事濟んだもの、倘ドソチヤソの喧嘩場騒ぎ火花を散す其中で通て行かもしれねへ親分男に似合ぬ未練な根性薄情な人と判つたらへん決して親分をやアなら子へから各々其後深切な能親分の見立替己ヤア是から八王子の小金井親分を便る積り相殿衆も確固した親分撰みが肝腎だと俱に此地と引拂ふ相談儘て旅宿賃の勘定濟せ五人の者の聽て甲府を出立きたるが素より住所も定まらぬ破落戸もゑ行方さへ何處どの知らず各自隨意立退く中に鯨魚金次の四人に別れ其夜の内に再び甲府へ立歸り最と怪しげなる安泊に四五日潜みて小室井方の家の動靜を窺ひつまた成る時の長次が宿の軒場にイセみる三保の松が生死踪跡を探らんと心を痛め居たりしに成る夜長次方にて聲喧しく云罵るの合點もかすど身寄せて立聞く者のある事を内の知らねば口論のますく烈しくなるうちにアノ三保の松の一件と洩聞こもるより金次の尙さら窓下近く耳を敲て窺ふ内に長次が聲にてマア奥へ来い云ふ事ありと障子押開け奥の間へ入たる動靜に其跡の更に言葉も分らざ

れはいと遺恨に思へども三保の松の一件と云ひしに正に親分の身に罹りたる事なるべし此上の虎穴に入り底の底まで穿鑿すべしと此に心を決せし如何なる所存ありての事か次編に詳しく書記さん

○第二十一編

再説鮎魚金みの翌日旅装束に姿を更め長次が許を訪問ていふ様私らの元三保の松の乾兒鮎魚金次といふものですが少々兄イにお眼に懸り度態々お尋すやした御宅ならばお邪魔ながら一寸お逢ひ下さりませと辭も低く言入るれば下女のお寅が心得て長次に斯と告るにど其金次どの過般殿府へ歸つた三保の松の乾兒のうちに在た奴だがまた立戻つて尋て来たの伺や殺した一件を歸つて来たのか何にもせよ油断の出来ずと用意の一膳側へはつけお寅に附懸て此方へ案内させ三保の松の乾兒にて鮎魚金次と云ひる、此間親分の宅でお眼に觸た様でもあるが長次に御用と云はつしやるの歸りの路費に尽たぬる草鞋錢でも無心に来たかと買出す噴嘩の辭と餘處に金次の故と懸懸に「ハハハ私ちの三保の松の乾兒で此中小

室井の親分方にてお眼を觸つた金次といふ者今日兄イをお訪すやしたの些と打わけて親分と兄イへお頼みすたサ其仔細と云やす元私が義理ある兄三島の與吉といふ者が駿府の文吉と争論を當時江戸から面を出したマノ三保の松を積箱入れ進々其夜與吉兄イを人なき處へ連出して殺した様子を後に聞か無念と思へば相手の大勢涙を呑んで姑くの時機を待つて三保の松が乾兒となつたも義理ある兄の敵を討度ばつかりですが渠奴の運の強いのか歎し討人も隙がなく惜き月日を送るうち今度當地へ来たのと幸へ折と見合亡義兄の恨を親つてやりてへと出かけて来たる甲斐もなく仇のまたも旅から旅何處に居るとも定ぬく目的なき跡を尾けんより小室井の親分に渠奴が借た二百兩を歸しに来るの必定あるから再度此處へ来るのを待ち兄イの怨を散したく他の乾兒を散た後弱きを教ふ親分の氣性と見込態々ど力を借に参りやしたが及ぬ心を推量して何卒討せてお呉よなせへと血走る涙もちら表るれど知らねば病犬長次の心落居て云々と三保の松をば撃つたる状を云はんとせしが待雲時一應親分に話せしうへ術こそありと思ふにぞ左あらぬ体にてうち點頭「始めて聞いた其話成

はせ男を磨くに似ぬ三保の松が卑怯な爲業か前が腹の立のも道理然した事どの事知らせ先刻の無禮の堪忍をなせへ併義氣ある其一言願ひどわれバ飽きでも命にかけて引受やせうまた親分へも相談して三保の松をバ引寄る手段を俱々勘考せやせうア夫までの窮屈でも私の宅に滞留せなせへ。コレお寅一本熱く浸て来など長次が体よく承諾し底の底の知らねども實否を探るの爰なりと猶も巧に辭と飾り三保の松の事と惡狀に口を固て罵りなせして終に當日より長次方の食客とあり暮し居たりぬ

○第二拾二編

鯨魚金次の目的まゝに長次の家に食客下男の如く立働くの素より深き思慮ある事ぞと何にも白齒のお寅といふ雷家の下婢の駿州生れ同じ國から来た人と聞けば就中執しくせしが性得少し何處やらに扱けた調子のあるうへに標致の勝分人並と外れて醜態評判者金次の心に思ふ様前の夜此處の門口にて立聞えたる其折に三保の松の一件を云ふたの正に女の聲翌日早速来たをりに居たる女のお寅のみ然すれば當夜の噂人の聲のお寅か但し他の人か何し

る當夜の一件と搜り出すに此お寅少し心のあるころ幸ひ色に事寄せ小室井等が爲せし惡事を許いた後術こそわれと夫よりしての尙一層お寅の助手して最と健々最立働くにぞお寅のいよく金治を慕ひ媚く風情に挑むと得たりと終に怪しき假枕寐物語に夫となく小室井またの病犬の常の動靜を尋しうへ三保の松が事と遠廻しに搜りながらも前の夜の口喧しき次第を聞しに根々白痴だけに鯨魚かたらしした口を眞實と思ひ金治に向ひて語るやう「妾の元と駿河から此甲州へ出て来た後小室井親分の宅へ奉公して今年で丁度六年餘りお内儀さんご死んでから毎夜妾に按摩をさせ夫ばかりでなく耻かしい色の歌ねと習ひ染めたに近ごろ柳町に江戸から来てゐる常盤津の師匠とやらに熱くなりまた夫のみか此處の兄いと謀合したうへ三保の松をト云さしながら心注さしか話を餘處へ紛らしかゝるを金治の故と面をふくらし「夫婦なならうと約束して互ひに心底明し合ひ頼みもまた頼まれたり命も棄る乃公が了簡夫にまだく惑疑やら三保の松の事を半分言さし後と云はぬハ不思議な譯ハ、ア夫じやア乃公が此間まで三保の松の乾兒で居たもる樹酌をして云はないのだナよし」

さういふ群なら乃公も其氣で慶期をするどツツと出られて有業の婦人殊にの少々事足らぬ
 お寅の事も魚の群を具にうけ涙ぐみ「此事ばかりの親兄弟へも他言をせぬとの誓ひで
 すがお前が是きり慶期をするど對面群を聞くわりの假令親分や長治兄に切殺されても可
 愛お前に話す仔細の外でもないがト知巳の杯盃に事寄せて我家へ招き切殺せし一伍一什を
 密々と物語しうへ更めいふ様「其夜此事と知つたのは當家の兄いと乾兒の中でも常からず
 一くいふ顔も殺した事を沙汰なしに各々手當の貫ひましたたが血の掃除やら何やかや一
 人で跡をかたづけた妾に何の沙汰もせず妾狂ひの夜泊日泊如何に親分なればとて餘り悲情
 少なさ過ると遂々果の愛想づかし長治さんの宅へ預られ下婢代りに此勤さ夫に妾へ無沙汰
 もあるツイ高壁で饒舌つたのを大方お前が聞たのでせうと漸々知た三保の松が横死の状を思
 ひやれば有業剛膽不敵なる金治も袖につ、みわへぬ涙を眼に紛らして須臾咽ひて辭なし

○第二拾三編

下婢のお寅へ色から持込首尾能聞いたる三保の松が横死の様子に鱧魚金治の胸も張裂口惜

さ此うへり名乗かけて親分の仇小室井はじめ長治を討て亡人の恨と散して手向んと思ひ立
 らしが熱々とまた前後を勘考るに鬼をも挫くと云觸した親分でも討果した小室井と云ひ
 病犬を所詮一人の細腕で撃取る事ハ協んまじ万一己が殺されたら親分が渠奴等の爲りに非
 業な最期を遂げた事を文吉親分やお濱姉公へ誰とて知らせて道る者なし然らなる時の親分
 の恨ハ散る、事あらす急ての事を仕損するど世の比喩にもある事なれば今始りの時機を待
 ち確に殺した逐一を小室井なりまた長治の口から話すを待て國へ歸り姉公と供々協議して
 爲術ありと思ひかへし無念の涙を裡へと看込み何卒して確良なる話しと索り出さんと茲に
 一計を胸に浮み或る日朝より心地悲し、とて一室に入り食とも斷て臥とりしお寅お寅の太
 く心配して眞實と思へハ薬上醫者と立騒ぐをおしどいめ些と譯あつて巳の病氣の人に逢ふ
 のを厭ふから明日の朝まで此座敷へお前の勿論長次兄イも必ず此處へ来ないやう歸られた
 なら言て呉る若言ふ事と肯ないで来るど了箇爲すへどど常に似氣なき権相に吩咐られて陪
 々と氣味惡さうに立て行しが馬鹿正直も其後の更に金治が臥したる室へハ行かねと徐る

に氣にかゝり何うした病氣か不審と思按に暮の灯ももしろ山先々主個長治が立歸り金治の何處にと尋るにぞ今朝から病氣で云々を仔細を話せば主個の長治の夫の何だか訝な譯己が様子を探つて見やうと切てある障子の隙より密に内を窺へば金治の蒲團の上に座り兩肌脱ぎて腹撫でさすり右手に持たる出刃庖丁にて既に斯うよと見ねたる状も長治の駭き駭入りて其手を堅と取押へ「譯の知らねど死なうどの何う云ふ心か」金治子細を話して聞かせると云ひれて金治の長治が顔をロツと見詰て怨し氣に「何う



した譯どの聞てへ子へ兄貴私がお前の宅へ頼みに来やした其起因を豈夫忘れの勇なざるめへ其時体よく受合はれた辭を眞と今日夕日まで仇な月日を経過て居たが昨日ナラリと聞いたに三保の松の越後から一昨日この地へ歸つて来たど私が居るも三保州へ直ぐに歸して遣んなすつたど聞ナヤア逆も己の仇と報ふ時とてある事なれば死んで亡兄へ分譯しやうと覺期を極めた今日の仕請長らくお世話になりやした禮の冥途で申やせう留めずと殺してお呉ンなせへと焦るを長治の零時と留め「夫じやアお前の夫程に三保の松とは討てへか」義理ある亡兄の敵もある一太刀なりとも恨をばらさしにや位牌の前へ濟みやせん「死なうと覺期のお前も私も無理に留めずへが其三保の松の此世に居すへ」エ、兄哥何と云なさる「サア其譯を話すからマア氣を鎮めて聞くが宜やサ

○第二拾四編

死を決めたる金治が動靜と偽りありとハ毫知らねば長治の譯を低ふして「先ごろ和殿が乃公を力り是まで親分と奪て居た三保の松への遺恨があるから供々協力になつて呉ると敵か

ら棒に振込んだり何でも胸に一物のあると見たゆゑ今日までの和服の袖と搜つて居たが眞實見ると立働きの殊に小室井親分と喋り合せて三保の松の一日昨日此地へ歸つて来たを和服が居るもろ駿州へ直ぐ逃したと云ふも其心底と見やう爲り今と眞實の三保の松が婆に居る子細を話してやるから亡義兄の位牌へ夫と侍るが宜と知己の盃杯に事海せ引入で殺せし動靜を透一述べ「夫につけても邪魔になる下婢のお寅が晝夜の事を詳細知つて居る事も可憐だが小の虫を殺して大の虫を助くる其料理方と附附られ人を殺すの蚤蚊より手易く思つてゐるにも相人が白痴なアノお寅何うも殺すにや忍びまへから此役廻りを引受て何處へ連出し後日の厄病難然やつての呉れへかど慈悲も情も無きが辭と吞込む鮫魚金治「始めて聞いた三保の松が小室井親分や兄の手で絶命とい俺が手を添へねば恨み散やした夫れで亡義兄も草葉の影で嘸鳴んで居るでせうとばかり涙の無念さぞ堪忍たる金次が胸悟られまじと長次に向ひ「今兄が話してお寅が晝夜の動靜をば知つてゐるもろ料理をせうどのコリヤ宜處へ氣が注ぎやした兄ハ何程鬼でも高が女を大人氣なく手を

下どのの藝が子へ渠婦の事乃公が引受お頼通り後腹の腦めねへやうに爲て来やせう「然してくれりやア乃公も安心幸ひ今夜の間に紛れコト斯してと私語の金次の點頭密々も須史語り居たりゆゑ金治のお寅に向ひ少しお前にいふ事が有から一寸其處まで来て呉れろと誘出して町外れの或る小料理店へ連行して今夜和女を連出したの實の小室井親分が殺してくれろと已への吩咐一旦解いた下紐の中云へず請台つたれど何とお前を殺されう併此地お彷徨してのお前の爲にならねへから聊かお前が此金を旅費に一先親里へ一時も早く歸りなせへ折を見合已が方からまた便をする事も有らうマカ此事を人に話と夫ころ己が活しておか子へ萬一誰ぞに尋られても溪間へ投られ氣絶したのを助る人があつたと云て決して已が助たとい口外をまぢやアなら子へぞと赫しつ賺しつ言聞せばお寅の青くなりたるのみにて物さへ碌に言葉で慄ひ怖る、動靜なれば然こそあらんと鮫魚の臆て料理屋の亭主に頼み同村の百姓と案内者となし駿河路指て送り遣り其身の再び長治方へ立歸りつ、山中にて絞殺したらへ溪川へ投込んだれば大丈夫と甘くも体を繕ひしが素より金治を信ぜし事

ゆゑ疑もせで安心なし懸て更め小室井へ紹介つ、是より長治を俱に藤三郎が無二の赤見となりたりし後の話の次編に分解すべし

○第二拾五編

再説鱈魚金治の其後折々長治と、もに小室井方へ立入て何卒一刀にても三保の松ヶ怒と散して呉んすと心を注げて寝へとも機会とてあらざるにど情々思ひ回らすに親分の殺害されし己一人より知る者なければ必定駿府のお濱村公が来してゐるに違ひあるまい哉へり小室井に体よく云て一度の駿府へ歸つて安藤村の大親分に勧誘なし再度来るとも遅うからしと或日長治に打向ひ乃公も長々親分や兄イの世話になりやしたが久しく名古屋へ歸りやせんから此打続た快晴と幸ひぶら〜往て参りやすと何象なれば長次の勿論小室井とても疑ひで恨がるゝして許せしゆゑ金治の表に之れと謝し耻真での仕替たりと笑を含みて甲府を立出道を急ぎつ取河なる安藤村に來し安政五年の春なりしが當時文吉の許見を連れ成田参詣に赴きたる不在なれば金治の望と失るひたれども男勝りのおはま村公にまつ